

千葉商科大学

[Chiba University of Commerce]

2025年度に大胆な 全学部改組を実施。 実学教育を軸に 変化を続ける大学



CUC未来会議でのフラットで未来志向の議論が改革につながった。

時代が大きく変化している今、大学も不断の改革が求められている。2025年度4月より大規模な学部改組を実施する千葉商科大学(CUC)は、まさに変わり続ける大学として注目されている。ボトムアップで改革をリードする教員、職員へのインタビューを通して見えてくる組織としての強みとは。そして、改革のカルチャーが教育にもたらす効果とは。

取材・文／伊藤敬太郎 撮影／マツモトタカン

次世代を担うメンバーが次世代の組織と人を議論

学部共通の教育を 強化する全学的改組

千葉県市川市にある社会科学の総合大学である千葉商科大学(CUC)は、「実学教育」を未来志向に発展させるため、2025年度から同大の基盤教育機構及び5学部7学科を新たな教育体制に改組する。

改編後は、1機構(基盤教育機構)4学部6学科19コースを予定しており、学部を問わず先端的な領域を学べるアドバンスト科目として、「グローバル」「情報・データサイエンス」「キャリア」「総合教養」の4プログラムを新たに設置する。これらの領域の知識・スキルは、今後の社会では分野を問わず求められるものだと、全学生が学べるようになった(図1)。

国際教養学部の学生募集は2024年度入学者を以て停止、同学部が培ってきた知見と取り組みは、新たに全学

横断型の国際人育成プログラムに転換される。これらの大改革の基となる新しい教育体制の案をつくったのが「CUC未来会議」だ。

「未来会議のメンバーは、今後10年20年位にCUCの幹部となることを期待する世代の中堅・若手の教職員です。それまでの全学の教職員を交えた議論のなかで前向きな意見を積極的に出していたメンバーから選出し、編成しました」(今井副学長)

選ばれたメンバーは、年齢も役職も関係なく、フラットに議論。大学組織では一般的に教授陣の発言力が強くなりやすいが、職員が積極的にコミットするのも未来会議の特徴だという。会議のリーダーである今井副学長も途中から、ファシリテーション役に徹し、ボトムアップの議論を活性化させることに専心した。

「大事なルールは、自分が属する部署の代表としてではなく、個人として議論

すること。これからの社会で求められる大学とはどのようなものか、今あるリソースを活かして改革するにはどうすればいいのかを、個人がもてる知見を最大限に活かして発言するよう求めました。そのため、個々の発言内容を会議の外に出さないなどの配慮もしました」

未来会議が目指したのは、従来の組織の形にとらわれない変化だという。



学校法人千葉学園 理事
サービス創造学部 教授
今井重男副学長

● 未来会議メンバーに聞く！

学生の「居場所」を作る「自分未来ゼミ」を企画・提案

未来会議では、大学にホームルームとキャリア教育とアクティブラーニングが合わさったような場、放課後の教室のように話せる場を作ろうと提案しました。2025年からの新体制では、初年次の半年間、「自分未来ゼミ」として全学共通の必修となります。学部横断で、これからの学生生活や自分の未来のことを車座になって語り合おう、それを通して議論する力を身につけよう、まだ何者でもない自分たちを確認し合おうと。今、多くの大学でなんとなく入学した学生が

居場所をなくし、離籍してしまうことが問題になっていますが、自分未来ゼミはまさに居場所作りにつながる試みだと考えています。学部を越えてお互いに刺激し合える仲間ができますし、今後の学生生活の指針もできますから。

自分未来ゼミはグループワークですから教員のファシリテーション能力が重要。そこを伸ばす取り組みも、教員同士のグループワークで進めています。学生たちに学び続けることが大切だと教えるわけですから、教員自身が変わり

続けていなければ嘘になる。自分未来ゼミを担当する20人強の教員陣を「戦う集団」にしていきたいですね。



国際教養学部
准教授
常見陽平さん

変化に対応し続ける人材を育成するために大学も変わり続ける

未来会議は一つの象徴だ。CUCは変わり続けることを志向する大学であり、そのカルチャーは教育に関しても大きく影響している。

「本学が育成を目指すのは『自ら学び続けて変化に対応できる人材』。そのためには、教える側の大学や教員が、常にその意識をもって変わり続ける必要があります。かつ、時代に合わせて受動的に変化するだけではなく、自ら主体的に動いて、微力ではあっても社会に影響を与える大学でありたい。本

学では、学生もその一員だと考えています」(今井副学長)

実学教育を理念とし、新しい時代の治道家を育成することを使命として、日本経済を担う企業や官公庁、ソーシャルな組織・団体に活躍する人材を輩出し続けるCUC。同大学は正課・正課外を問わず、学生が主体的に取り組むプロジェクト活動が活発だ。多くの学生が、企業と連携したプロジェクトや地域・社会に働きかけるプロジェクトを通して、行動する力を養っていく。

「やってみる」ことがCUCのポリシー

その一例が「学生ベンチャー食堂」。学内のフードコートの店舗は、手を挙げた学生が運営を担当。大学のサポートもあるが、自ら出資をし経営をする。

「とにかく『やってみる』ことが本学のポリシーです。うまくいかないことも当然あるでしょう。それでいいんです。『では、どうしたらいいのか』を考え、それを次の行動につなげることで、実社会で通用する力を身につけてほしいですね」(今井副学長)

実学教育を理念に、教育、さらには入試に関しても不断の改革を続けるなかで、学生の表情や姿勢も変わってきたと今井副学長は語る。

「コミュニケーション力がある学生が増えて、学内が明るくなりました。また、主体的に学ぶ学生も増えてきたと感じています」

変わり続ける大学だからこそ、自ら行動し、変化を仕掛け、リードする人材を育てることができる。それがCUCの教育の本質だ。

図1 2025年度以降教育の全体像



最年少メンバーの職員として未来会議に参加

私は未来会議に参加したメンバーの中では最年少でした。当時は入試広報課在籍でしたが（現在はキャリア支援課に異動）、職員としての業務では教員との交流はどうしても限定的になります。そのため、未来会議で多様な学部が多様な先生から、それぞれの教育にかける思いを聞くことができたのは貴重な経験でした。私は、職員として入試広報の業務を通して感じていたことなどを発言しましたが、それだけではありません。私は本学の卒業生で

もあるので、議論のなかで、学ぶ側からの思い、学生として感じた本学の実学教育の強みなども伝えました。

未来会議は、今までの延長線上で考えるのではなく、「学生のために何ができるのか」を一からドリーミーに議論する場。私自身、それまで1を10にする仕事は得意でしたが、未来会議を経験したことで、0から1を生み出すことのワクワク感を知りました。もちろん、それは日常業務にも活かしていて、「これでいいんだっけ」「もっとできることがあるのでは」と考

える習慣が養われたと思います。これからもキャリア支援の現場から大学の変化に貢献していきたいですね。



入局5年目
キャリア支援課
堀田知里さん

COLUMN

入試改革でも若手が活躍！育てたい学生を選抜するための仕組み作りを推進

CUC入試制度に関しても、毎年のように改革や新制度導入を進めている。その一つが、高校の調査書等の内容を点数化し、40点分を配点する一般選抜の調査書得点という制度だ。

一般選抜のすべての入試で調査書に配点

入試課の関 尚子さんは導入の背景・経緯を次のように振り返る。

「入試課では、CUCが育てたい学生を選抜するためにはどのような入試制度がいいのかを常に議論しています。本学は実学教育を重視し、学生が主体的に関わるプロジェクトを通じた学びを大切にしています。その観点から考えたとき、重要になるのは学生の主体性や積極性、協働する力です。こうした力は学



入局8年目
入試課
関 尚子さん

力試験だけでは測れません。そこで出てきたアイデアが調査書の活用でした。調査書には高校時代の取り組みや成果など多くの有益な情報が含まれていることを日頃から感じていました」

高大接続にもつながるこの制度を試験的に導入。その後、この入試で入学した学生をリサーチしたところ、調査書の内容が優れている人の方が、大学入学後の成績がよい傾向が確認できたため、2021年から一般選抜のすべての入試で導入された。

2024年度入試から探究学習評価型を導入

また、2024年度入試から給費生総合型選抜のなかに探究学習評価型を新設する。このユニークな新制度の導入プロジェクトに参加した入試広報課の松原奈菜さんは次のように解説する。「探究学習で取り組んだことを提出してもらい、それに口頭試問を加えて評価の材料とする制度です。“こんなすごいことを探究してきた”ということもアピール



入局2年目
入試広報課
松原奈菜さん

してほしいですが、それだけでなく、“失敗したけどこんな気づきがあった”“次の学びに活かしていきたい”といった面も積極的に評価します」

入試広報課の職員として全国の高校を回っているなかで、それぞれの高校が探究学習に真摯に取り組んでいるのを直接知ったこと、探究学習がCUCの求める人材との親和性が高いことがこの新制度を導入した理由だという。

関さんも松原さんも民間企業からの転職者。入局してからはまだ若手だが、CUCでは経験年数にかかわらず、室課を横断したプロジェクトにアサインされることは珍しくないという。若手が改革にコミットし、とにかく「やってみる」の精神でトライできる環境が、CUCのクリエイティブな入試改革の下地となっている。